

■ 市長から市民のみなさんへ

山陽小野田市長
白井 信文



■ 学校と地域の関係が 大きく変わろうとしています ～地域力・学校力向上プロジェクト！～

本市教育委員会の教育長から、次のようなレポートが届きました。

「学校は、子どもだけのものではない。地域の者が集い、学ぶ拠点である。」こんなことを言うと、みなさん「えー？」と思われるのではないのでしょうか。今、学校と地域の関係が大きく変わろうとしています。まず、この4月から全ての小中学校がコミュニティ・スクール(地域運営学校)となり、地域住民や保護者が学校運営に参画するようになります。地域住民が学校の内外で、授業を単独で、または子どもと一緒に受けたり、逆に先生として熱い思いを子どもに伝えたりすることが、どんどん盛んになります。

それに並行して、学校と地域との垣根が低くなって、公民館での活動や福祉、防災、市民活動などが、学校で行われることも増えることでしょう。また、地域の学びや誇りづくりを住民と子どもと一緒にやって取り組み、地域を活性化し、次代へ繋ぎます。このまちの未来のために共に汗を流すのです。

このように教育委員会は、学校と地域、市長部局、各種団体が緊密に連携した大きなネットワーク「地域協育ネット」を作ろうとしています。みなさん、まずはこのネットワークに地域の誇りをかけて、各中学校区で独自の名前やキャラクターを作ろうではありませんか。既に

「りゅうみんネット」(竜王中学校区)と、「ねたろうねっと」(厚狭中学校区)が誕生しています。

教育長の説明によると、この方向付けは、文部科学省の指導のもと、既に全国的な取り組みとなっており、山口県教育委員会も、「地域教育力日本一を目指す」とのスローガンを掲げているそうです。このような「地域協育ネット」は、たとえば「学校も、地域の公共施設の一つ」で、地域づくりの柱の一つに学校を位置づけているものと考えていただくと、理解しやすいように思います。

私も市民のみなさんと一緒に、意識の切り替えに努めてまいります。

■ 新春を振り返って

昨年、「理科大の公立化」と「レノファ山口への応援」によるまちづくりの課題が加わり、市政も、これまで以上に多忙になりました。昨年秋には、理科大の中堅の先生方と組んで、県下の高校70校を回りましたし、今年は、4月からいよいよ公立大学がスタートすることから、市議会議長、理科大学長との3人で、市内の主だった企業を回りました。また、全課長からのヒアリングを終え、新年度の事業採択や予算査定にほぼ目途をつけたのち、1月最後の週は、全国市長会の理事会と市内企業の本社への挨拶回り(理科大卒業生の就職先開拓、公立大学法人への協力依頼)に3日間上京しました。暖冬の予想が崩れ、後半は予想外の寒さに震えあがった新春のひと月でした。